

読書活動の日常化に向けて

来年度から実施される学習指導要領では、「読書活動の日常化」が打ち出されています。本特集では、今の子どもたちの実態と読書活動を日常化するために心がけたいことを、高木まさき先生にうかがいます。

さらに、実践事例として、読書活動に力を入れている三郷市立彦郷小学校の取り組みをご紹介します。



「読書コミュニケーション」をしよう

横浜国立大学 教授
高木まさき



日本の子どもたちは読書が好き？

—子どもたちの読書離れが問題視された二〇〇〇年頃に比べると、今、子どもたちの読書量は増えてきているようですね（p. 3 資料1）。

高木 朝読書などの取り組みがさかんになり、子どもたちの読書量は回復してきています。

読書離れが深刻だった頃のPISA二〇〇〇調査（※1）では、日本の子どもたちの、読書生活における興味深い結果が出ています。

「毎日、趣味として読書をどのくらいし

ますか」という質問に対し、「趣味で読書をするのではない」と答えた割合が、OECDの平均値三一・七％に対し、日本の子どもは五五・〇％で、第一位。また、「どうしても読まなければならないときしか、本は読まない」と答えた割合もいちばん高い。日本の子どもが、他国の子どもたちに比べて、本を読んでいることが浮き彫りにな

りました。

しかし、一方で、「読書は時間の無駄だ」「とてもよくあてはまる」と答えた割合は、OECD平均値が八・三％に対し、日本の子どもは六・六％と、韓国の二・八％に次いで少ない。また、「本の内容について人と話すのが好きだ」「本をプレゼントされると嬉しい」「本屋や図書館に行くのは楽しい」などの質問に「とてもよくあてはまる」と答える割合が、他国に比べ高いのです（※2）。

この調査結果から、日本の子どもたちは、本は読んでいないけれど、読書の価値

は認めていて関心が高いということがわかります。きっと「本を読まなければいけない」という意識はあると思うんですね。ですから、きっかけさえ与えれば読むようになる。二〇〇〇年頃、子どもたちの読書量は過去最低水準でしたが、急速に回復してきています。これは、朝読書などが始まり、もともと読書に関心のあった子どもたちが、きっかけを得て、読書へ向かい始めたと思われることができます。このように、きっかけを与えれば読むようになるので、読書指導は、可能性を秘めたやりがいのある分野だと思います。



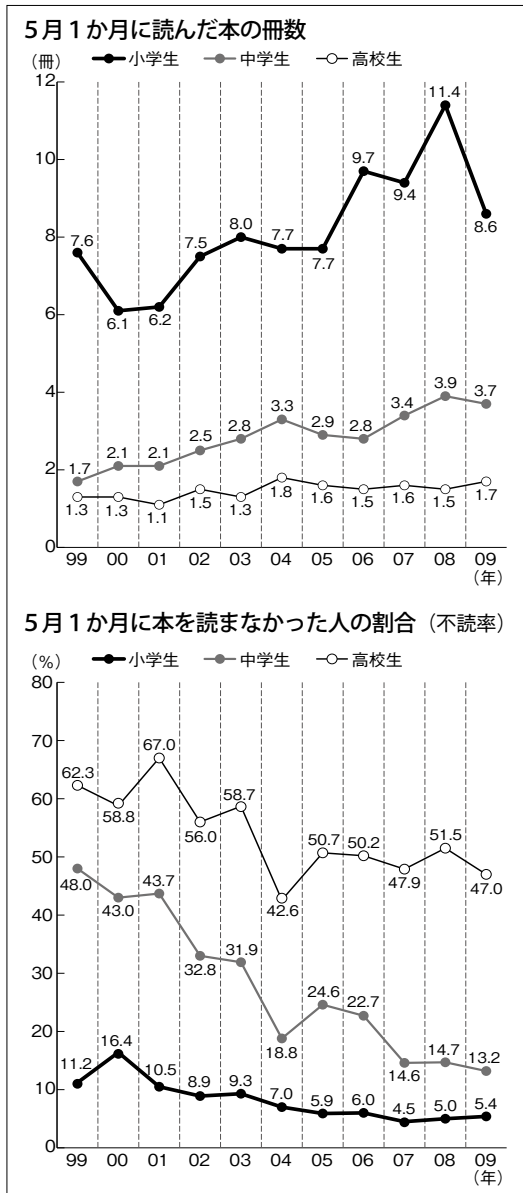
今の子どもは「名作」を読まない？

—最近の子どもたちが読んでいる本を見てみると、『犬と私の一〇の約束』『学校の怪談』などのテレビアニメ化または映画化されたものや、『かいけつゾロリ』『黒魔女さんが通る!!』などのアニメ調のイラストが挿絵に使われているシリーズものが目立ちます（p. 4 資料2）。

高木 そういう実態を見て、「子どもたち

読書活動の日常化に向けて

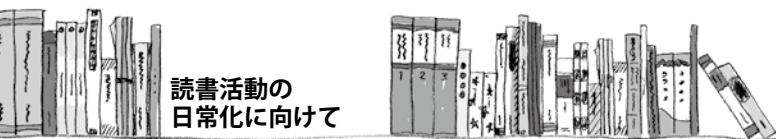
資料 1



＜出典＞「2010年版 読書世論調査」（毎日新聞社）
調査概要：小学生は全国の4～6年生を対象に、2009年6月第1週または第2週に実施。サンプル数は3,352人。

※1 PISA 調査
OECD（経済協力開発機構）が2000年から3年ごとに行っている、義務教育修了段階の15歳の生徒を対象にした学習到達度調査。

※2
本文中で示したPISA調査のデータは、『生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2000年調査国際結果報告書』（国立教育政策研究所編）による。PISA2003年、2006年調査には、この種の質問項目はない。



大人が本を読んでいることが、 子どもにとって何よりの読書環境です。



たかぎ
高木まさき

1958 年静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。著書に「他者」を発見する国語の授業（大修館書店）、『情報リテラシー 言葉に立ち止まる国語の授業』（明治図書出版）などがある。光村図書小学校・中学校国語教科書編集委員を務める。

― 来年度から実施される学習指導要領では、読書活動を習慣づけることや、読書活動を家庭や地域につなぐことが重視されています。読書活動を日常化するために、心がけることは何でしょうか。

高木 僕は、何よりも「大人が本を読む」ということが大事だと思っています。教師や親が本を読んでいるということが、子どもにとってすばらしい読書環境になります



本を通して コミュニケーションを

さまざまである、ということを理解したうえで、子どもたちの発達段階や興味にに応じて本を紹介してもらいたいのです。それから、映像化された作品やライトノベルなどは、子どもにとって、とても身近なものです。それらの作品にも目を向け、うまく生かして子どもたちの読書を広げていっていただきたいなと思います。

から。

まわりの大人たちが本を読んでいると、子どもは影響を受けて、背伸びして少し難しい本に挑戦しようとするんですね。そういう「背伸び読書」をすると、読めない漢字、知らない言葉にたくさんふれることができる。それが語彙力を高めることにもつながるでしょう。

三郷市立彦郷小学校（p.67）では、地域のボランティアの方の協力を得たり、「家族読書の日」を設定したりしています。学校だけでなく、地域・家庭に読書活動を広げる、というのとても大切なことです。

繰り返しになりますが、「読書活動の日常化」のベースになるのは、「教師（または親）が子どもと本の話ができること」です。ぜひ読書をして、子どもたちに本のお話をたくさんしてあげてほしいですね。

それから、子ども同士の読書交流も大事です。友達から得た本の情報は、ストリートに子どもたちの心に響きますから。授業の

は本を読んでいるかもしれないが、読書の質は向上していない」と言う人がいます。しかし、私はそう簡単に決めつけるべきではないと思っています。

例えば、一九五〇～七〇年代、子どもたちによく読まれていた本を挙げると、『豊臣秀吉』『次郎物語』『ロミオとジュリエット』『野菊の墓』など、同時期に映画化やテレビドラマ化された作品がとても多い。映像化されることによって、作品を身近に感じ、本を手にしたのだと思います。他のメディアに影響されて、本を読み始める子

どもは、昔から多かったんですね。

また、今、ライトノベル（※3）がとても人気ですが、例えば『文学少女（※4）』から太宰治に興味をもったり、太宰の作品を読んだりすることもあるでしょう。ライトノベルをきっかけに読書が広がることもあるはず。

個人的な話になりますが、僕は子どもの頃、読書が苦手でした。「名作だから読みなさい」と言われて読んだ本がつまらなくて、読書から遠ざかってしまったんです。もともと自分の身近なものから読み始めれば

よかったなと今になって思います。

たしかに「名作」と呼ばれる作品を読むことは大事かもしれませんが。しかし、例えば「名作」である夏目漱石の『坊っちゃん』（一九〇六年発表）は百年以上前の作品で、百年も経てば、ものの見方・感じ方などが、今とはずいぶんズレます。今日の学園ものに慣れた子どもたちは、同じ学園ものでも『坊っちゃん』のストーリーには共感しづらいかもしれません。

先生方には、その「ズレ」を理解し、さらに読者によって「名作」と感じる作品は

なかで、読書交流の場面をどんどんつくってほしいです。また、同年齢だけでなく異年齢ともコミュニケーションの場があるとよいですね。彦郷小学校のように、幼稚園や中学校と交流すると、さらに世界が広がります。

大人も子どもも、「自分のことを話すのは抵抗があるけど、自分が読んだ本ことは話せる」ということがあると思います。本を通して、自分の考えや思いを話したり、友達や先生の考えを知ったりして、コミュニケーションをはかる。そういう「読書コミュニケーション」を子ども同士、または子どもと大人で、どんどん広げていくて、「読書コミュニケーション」をつくっていくてほしいですね。それが、読書活動の日常化につながるでしょう。

資料2：1か月に読んだ本 ベスト5 (2009年5月1か月に読んだ本)

▼男子

順位	実数
小学4年生	1 三国志 21
	2 学校の怪談 17
	3 かいけつゾロリ やせるぜ！ダイエット大さくせん 15
	4 かいけつゾロリ ちぎゅうさいごの日 13
	5 かいけつゾロリ イシシ・ノシシ大ピンチ!! 12
小学5年生	5 かいけつゾロリ たべられる!! 12
	1 日本の歴史 34
	2 三国志 18
	3 かいけつゾロリのてんごくとしごく 15
	4 西遊記 14
小学6年生	5 かいけつゾロリ たべるぜ！太ぐいせんしゅけん 11
	5 学校の怪談 11
	1 日本の歴史 81
	2 三国志 29
	3 江戸川乱歩シリーズ 18
小学6年生	4 怪盗ルパンシリーズ 15
	5 世界の歴史 14

▼女子

順位	実数
小学4年生	1 犬と私の10の約束 10
	1 ヘレン・ケラー 10
	3 赤毛のアン シリーズ 9
	3 おきやくさまはオバケ！ 9
	3 化け猫レストラン 9
小学5年生	1 赤毛のアン シリーズ 12
	1 黒魔女さんが通る!! Part 3 12
	3 黒魔女さんが通る!! Part 2 11
	3 黒魔女さんが通る!! Part 10 11
	3 若おかみは小学生！ 11
小学6年生	1 学校の怪談 19
	2 恋空 13
	3 日本の歴史 12
	4 犬と私の10の約束 10
	5 黒魔女さんが通る!! Part 6 9
小学6年生	5 ヘレン・ケラー 9

<出典>「2010年版 読書世論調査」（毎日新聞社）

※3 ライトノベル
アニメ・漫画調のイラストが表紙・挿絵として入ることが多い、主にティーン向けのキャラクター小説。

※4 『文学少女』
ライトノベルのシリーズ作品。野村美月著・ファミ通文庫（エンターブレイン）より刊行。実在の文学作品をモチーフとしたミステリー小説。第1巻『“文学少女”と死にたがりの道化』では、太宰治の『人間失格』が題材となっている。



埼玉県三郷市立 彦郷小学校

三郷市は、「読書のまち三郷」をスローガンに掲げ、読書活動推進に力を入れています。今年度、彦郷小学校が「平成二十二年子ども読書活動優秀実践校」として文部科学大臣から表彰されました。

子どもたちが読書へ向かうよう、さまざまな工夫をしている彦郷小学校の魅力的な取り組みをご紹介します。

埼玉県三郷市は、平成十八年度からの三年間、国立教育政策研究所の委嘱を受け、「生きる力を育む読書活動推進事業」に取り組んできた。彦郷小学校はその推進協力校のうちの一つである。

『読書で育む豊かな心と学ぶ力』を研究主題とし、三郷市教育委員会の指導のもと、子どもたちの読書活動を充実させるために、さまざまな取り組みをしています。そう話すのは、大友みどり校長。彦郷小学校では、次の①～⑤を基軸にし、読書活動を推進している。

①読書環境の充実

彦郷小学校に一歩足を踏み入れると、読書案内のカラフルな掲示物や書棚が目をはひく。地域のボランティアの方々や教員らによって製作され、どれも手のこんだ力作だ。それらを見ながら歩いていくと、知らず知

らずのうちに図書室へたどり着くようになっていく。

その図書室へ続く廊下は「ブックストリート」と呼ばれている。休み時間になると、子どもたちがわっと集まり、真剣に本を選び始める。「ブックストリート」以外にも、各階に読書スペースが設けられ、子どもたちはベンチに腰かけたり畳に座ったり、思い思いの場所でも本を読む。図書室はもちろん、それ以外の場所でも本を手に入れるような読書環境が作られている（詳細はp.10～11参照）。

②読書量の向上

子どもたちが意欲的に本を読めるよう、「読書記録」を推進している。一年生は九〇冊、二年生は二〇〇冊、三年生は二六〇冊、四年生は三五〇〇ページ、五年生は六五〇〇ページ、六年生は九五〇〇

習の時間に作成した大きな「布絵本」を参し、六年生の児童に読み聞かせをする。こうした幼・小・中の「読み聞かせ」を通じた交流も大きな特徴の一つである。

⑤家庭・地域との連携

彦郷小学校の読書推進は地域ボランティアの協力なくしては語ることができない。掲示物の作成、本の整理・修繕などの細かい作業や、読み聞かせ（写真②）など、地域のボランティアが、子どもたちの読書活動を支えている。

また、市立図書館との連携も強く、昨年度は計一八〇〇冊を貸し出してもらい、学

ページ、と目標を設定し、読書記録をつけさせている（写真①）。記録することで、子どもたちは達成感を味わうことができ、意欲的に本を読み進めることができる。

また、学年ごとに「三郷市おすすめの本二〇冊（※）」の一覧を掲示し、読んだ子どもが、自分の名前を書いたシールを貼れるようにしている。友達がどんな本を読んでいるかがわかり、次の本を手にとるきっかけとなっている。

③問題意識をもって読む子の育成

国語科の授業を中心に、学習過程で読書活動を位置づけている。

国語科では昨年度、全学年、説明文教材の授業で読書活動を位置づけた。「どうぶつの赤ちゃん」（二年下）では、本で調べながら、「図鑑『〇〇の赤ちゃん』作り」をした。また、「ごみ問題ってなあに」（五

級）ごとの読書活動などに役立てた。

家庭との連携では、月二回「家族読書の日」を設定している。その日は、親と子がいっしょに本を読み、プリントに感想を書く。また、年に四回「読書俳句」を募集し、親子で考えた俳句を校庭のフェンスに掲げている。「春風がぼくのかわりに 本めくる」など、読書の情景が思い浮かぶ作品が多く寄せられる。今夏は二百人以上から応募があり、盛り上がりを見せている。

* * *

彦郷小学校では、このようなさまざまな取り組みを通し、子どもたちがごく自然に本に親しんでいる。

「大人になっても、ずっと本と仲良くしてほしいと思っています。伝記を読んで偉人と出会ったり、自然を描いた本から環境に興味をもったり、物語を読んで涙したり……そういうことを一生続けていってほしい。そのきっかけづくりを小学校でしていきたいと思っています」と大友校長は力強く語る。

読書活動の 日常化に向けて

④読書による交流

隣接する幼稚園や保育園の園児を招き、図書委員が読み聞かせを行っている。また、中学校の生徒が彦郷小学校へ読み聞かせに訪れることもある。中学生は、総合的な学



写真2…読み聞かせボランティアは計12人。ローテーションで毎週金曜日の朝に読み聞かせを行っている。

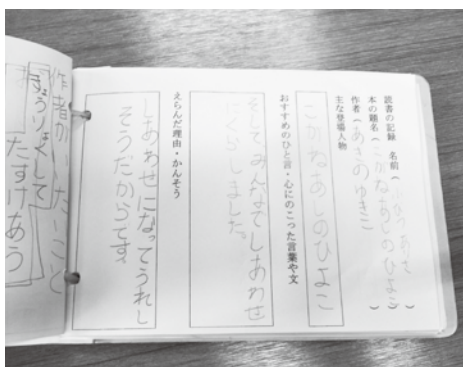


写真1…3年生児童の読書記録。作者名・主な登場人物・心に残った言葉などを書く。

※三郷市おすすめの本二〇冊
三郷市教育委員会が、子どもたちに読んでほしいと選んだ本。低・中・高で各二〇冊。



読書活動を取り入れた授業



本と友だちになろう——「三年とうげ」(三年上)——
三郷市立彦郷小学校 矢持美帆

1 はじめに

本校の児童は、読書が好きな子が多く、意欲的に本を読む姿が見られる。しかし、文章の筋のおもしろさだけにとらわれていることが多く、登場人物の心情や情景描写を味わいながら読み深めるところまではなかなか至っていない。できれば、読後に自分の感想を記録したり、友達と伝えあったりして、読書活動を深めさせたい。

本稿では、教科書三年上 p.66～67に示されている本の帯作りの実践を紹介する。本の帯は日常生活でも見かける、子どもたちにとって身近なものである。帯には、端的にその本の魅力が表されているので、本を読んだ感想を簡潔に表現したり、要旨をまとめたりする学習につなげることができる。

この実践では、韓国の民話「三年とうげ」から、世界の民話・昔話へと、読書を広げることで、各国の文化の違いや、逆に文化が違っても根底にある人々の思いは変わら

ないことなどを感じとらせることに主眼を置いた。

2 指導計画(全十六時間)

第一次 実際の本の帯を見ながら、本の帯の役割について考える。(一時間)

第二次 韓国の民話「三年とうげ」を読み、感想を発表し合ったり、印象に残った言葉などを選び出したりする。(五時間)

第三次 「三年とうげ」の本の帯を作る。作成した「三年とうげ」の帯を、見せ合い、お互いのよいところを見つける。(三時間)

第四次 世界の民話や昔話から好きな本を一冊選んで帯を作り、お互いの帯を鑑賞し合う。その中から興味をもった本を選び、読む。(七時間)

この単元を学習する前に、市立図書館に、世界の民話や昔話の貸し出しを依頼した。市立図書館は、授業資料用として三年生が

3 指導の実際

読める世界の民話や昔話を四十冊ほどピックアップし、準備しておいてくれた。

第四次 第十二時
自分が選んだ本の魅力を伝えられるような帯を作る。



市立図書館から借りた本は、教室に置き、貸し出し期間中は、子どもが自由に手にとって読めるようにした。今回借りた本は、『吉四六さん』『プレーメンの音楽隊』などの世界の民話や昔話が40冊ほど。学校図書館だけでなく、市立図書館の蔵書を利用することで、児童がより多くの作品にふれることができる。

読書活動の 日常化に向けて



選んだ本の帯作りをする児童。

まず、「三年とうげ」で作った帯を見せ合い、お互いのよいところや表現の工夫を再確認させた。

前時に、学校図書館や市立図書館の本の中から、帯を作りたい本を一冊選ばせておいたので、その本の帯作りに入る。児童には、次のような手立てを示した。

- ・帯に引用できそうな言葉やおもしろいと感じたところに付箋を貼る。
- ・スペースが限られているので、いちばんおもしろいと思ったところを書く。

- ・友達に薦めるための帯なので、友達に興味をもってもらえるよう、吹き出しを入れたり、「!」「?」などを使ったりするなどの工夫をする。
- ・本に合った帯になるように、実際に、本に帯を巻きつけて、文字や絵の大きさ・色などを考えて書く。

お互いの帯を見せ合う場面では、「おもしろい本がたくさんあるね」や「早く続きが読みたいな」などと言いながら、お互いの帯のよさを認め合っていた。

4 おわりに

おすすめの一冊を選び、本の帯を作ることは、児童にとって初めての経験だった。しかし、友達に本の魅力を伝えるため、何度も本を読み直し、中心となる言葉を考えたり、要旨をまとめたりするなど、意欲的に取り組むことができた。また、お互いの帯を見せ合い交流したことによって、世界にはさまざまな民話・昔話があることを感



左:『ちいさい ちいさい おばあさん』(イギリスの昔話)物語の一部を引用し、「つづきは本で…」と、本を読みたくするような工夫をしている。

右:『かっぱのがみ』(日本の民話)かっぱの頭の皿に書かれた「あやしい手紙はうけとらないほうがいいかも」という言葉が目にとまり、ひきつけられる。

じとらせることができたと思う。今後は、目的に応じて本を選び、読むことができる児童の育成に努めたい。



読書環境づくり



彦郷小学校では、子どもが本を読みたくなるように、さまざまな工夫をし、読書環境を整えています。その一部をご紹介します。

■図書室へ続く「ブックストリート」。



低いベンチ。子どもたちは、ちょこんと座って、本を読む。

読み聞かせボランティアが、読んだ本の表紙をカラーコピーして掲示。読み聞かせてもらった本を、「自分でも読もうかな」と思わせるのがねらい。

国語科の教材に関連した本のコーナー。各学年の棚があり、写真は6年生の棚。「やまなし」の作者・宮沢賢治の作品が並ぶ。



三郷市の民話コーナー。三郷市の地図に、どの民話がどこで伝わっているのか示され、一目でわかるようになっている。

回転する書棚を図書室の前に。「かいけつゾロリ」シリーズを置くことで、男子児童が集まってくる。



■各階に読書スペースを設置。学年に応じた本を置いていく。



■低学年の階には畳の読書スペース。



大きな絵本のコーナー。休み時間には、子どもたちが肩を寄せ合って、読む姿が見られる。

「モチモチの木」(三年下)でおなじみの斎藤隆介氏のコーナー。作者や各作品の紹介文が、掲示されている。



児童全員が「読書バック」を持っている。図書室で借りた本はこのバックに入れ、机の脇にかける。少しでも時間があれば、そこからサッと本を取り出して読む。



埼玉県三郷市立彦郷小学校
埼玉県東部に位置する三郷市。彦郷小学校のスローガンは「本は心のエネルギー」。2006年より読書活動を推進。09年に創立30周年を迎えた。(児童数557名／大友みどり校長)